

# ついでる ついでる

酪農家 吉川友二

今年の冬休みに、沖縄へ家族旅行に行った。冬休みの家族旅行も初めてなら、沖縄へ行くのも初めて。旅行が決まると『修学旅行のための沖縄案内』などという本をまず買ってきて、つい勉強してしまふ。本によると沖縄本島の中南部は珊瑚礁が隆起して出来ている、沖縄戦は三ヶ月以上にわたり本島では三人に一人が亡くなっている。そして今でも本島の二〇%近くが米軍の基地である。

沖縄では長男の三年生の元(はじめ)と一緒に、百六十キロを自転車で走る大会に出た。青い海、青い空、さんご礁の白い島々、そこにかかる橋を二人で走る姿を一年前から心に思い描いていた。しかし大会は曇りでスタートし、そのうちに雨が降り出し、昼食を取る頃には一時強くなって、後は降ったり止んだりでした。そして白くはすの珊瑚の島々は、木々に覆われて緑の島でした。朝七時にスタートして、夜の七時過ぎに無事に完走できた。

心因性の頻尿である。過活動膀胱ともいうそうです。このような長距離の自転車大会に出ると大変だ。立ちしよ

ん(失礼)の出来ない街中ほど緊張しておしっこがしたくなって我慢が出来なくなる。おしっこをする度に元を待たせるので申し訳ないし、恥ずかしい。この頻尿はニュージーランドの牧場で働いていた時、一緒に働いた牧場の親方との仲がどうしても上手くいかなかったときから始まった。あれから二十年以上ものお付き合いだ。今あることにはすべて意味があるという。しかし、この頻尿ともそろそろ感謝をしてお別れをする時が来たのかなと思っている。楽な気持ちで治していきたい。

一九六四年の東京オリンピックの年に長野県の上田市に生まれた。水俣病などの公害のニュースを見聞きしたり、至福の時を過ごした田畑や豊かな自然が壊されていく。社会に対して怒りと悲しみを持って育った。人生で道を選ぶ時には子供のときのこの怒りと悲しみを大切にしたいと思ってきた。でもこの原稿を書き始めた頃に、子供が学校で習ってきたのだろうか、「悲しみは優しさに、怒りは強さに」と口ずさんでいるのを聞いて、うなづてしまった。

一九九一年、バブルの真っ只中に大学を卒業した。友人達の華やかな就職活動を横目に見ながら、就職活動もしなかった。卒業ぎりぎりになって大学院には行かずに

農業をしようと決めた。「自然とは何かかわかりたい、それが人生の目的だ」、「好きなことをしなければ人生は短い」自給自足をして自然のなかで生活をしよう。知床の斜里町に借りられる土地が見つかり、テントを入れた大きなザックを一つ担いで斜里町へ向った。町役場の方に「少し農業を修行してからまた来い」と反対され、土地が借りられなくなった。それからの三年間、北海道各地の農家で働いた。突然訪ねて行っても、日本の農家の方々は例外なく皆暖かく迎へ入れてくれた。就農するための資金を貯めるために、冬場になると内地で出稼ぎをして働いた。その間にバブルははじけた。

畑作、水田、養鶏、羊、酪農の牧場でも働いた。牛は人間の食べられない草を食べて人が食べられる乳を出すことが出来る。そこに牛を飼う意味がある。しかし、牛を畜舎に閉じ込めて穀物を沢山与えて沢山牛乳を搾る、というのが当時からの常識であった。まさにニワトリのケージ飼いと同じ発想ですね。北海道でさえ放牧をしている酪農家は一割位です。草のみでは酪農は出来ないものと思ひ込んでいた。三度目の出稼ぎに行く途中に、友人の働いている牧場を訪ねた。本棚にニュージーランドでは牛に穀物を与えずに放牧のみで牛乳を生産していると書いてある本を見つけた。

出稼ぎ先の東京で、その本の翻訳を企画した社長さんに会って、ニュージーランド人の著者を紹介してもらった。ニュージーランドへ渡って牧場で働くことにする。

責任を任せてくれる牧場の仕事と、働き過ぎないゆとりのある生活が充実していたので、一年のばしにしていたら四年になった。学校で酪農を学びながら、いろいろな牧場で働いた。四年目には百五十頭以上搾る牧場を一人で任せられた。学校もすべての酪農コースを終えることが出来た。日本の社会、酪農のために少しでも何かが出来たのではないかと、日本に帰ることももう迷いはなかった。

日本へ帰って、ニュージーランドで一緒に旅をして遊んだことのある若者が跡を継いでいる牧場を訪ねた。隣の足寄町では放牧をしている酪農家がいると、連絡を取ってくれて、足寄まで車で送ってくれた。紹介された佐藤さんは、ニュージーランドに視察旅行に来たときに会ったことがある方であった。

道南の伊達にあるびっくりドンキーの牧場で一年間お世話になった後、旭川の牧場に引越して、一九九九年の秋から就農する土地を探し始めた。十勝は農地の値段が高いからと最初から十勝での就農は考えていなかった。

道東を訪ねた帰り道に、足寄の佐藤さんに挨拶に立ち寄った。すると役場の方、開拓農協の方、酪農家の黒田さんと四人で出迎えてくれた。一緒にお昼を食べていると、食事も終わるころに黒田さんが手を打って、「あつ、そういえば離農してもよいというおじいさんとおばあさんがいる」と言った。食べ終わるとすぐ、みんなでその農家へ向った。

木下さん御夫妻は、長野県の出身で若くして戦後開拓に入られた。突然の訪問にもかかわらずいろいろ話をしてくれて、跡継ぎもいないので売ってもいいと言ってくれた。バブルの頃には高いお金で買ってくれるという人もいたそうだ。息子さんは旭川で農業普及員をしているという。私が旭川でお世話になっている普及員の方も木下さんなので、旭川に帰って聞いてみると、はたして息子さんであった。道北と道東に候補地があり、どこで就農するか決めるまでに一冬を過ごした。足寄に決めて、春まだ早い三月の終わりに木下さんへ挨拶をしに行く朝、出かけようとドアを開けると、息子さんが用事でドアを開けて入ってくるところだった。いよいよ大きな借金をして自分で農業を始めるのだと決断をする夜は喉がからからになってなかなか寝付けなかったが、決断をした朝は自分でも不思議なくらいすっきりしていた。ザック一

つの旅立ちから十年が経っていた。

二〇〇〇年の六月一日に足寄に引越した。まず子牛を三十頭買って放牧し、バラ線の柵を撤去して針金の電気柵に張り替えたり、水槽を設置したりなど放牧が出来るように牧場の整備を始めた。三十五歳、まだ独身だった。仕事の休暇を取って富山から体験実習に来ていた女性を近くの酪農家の親方が紹介してくれた。

彼女を私のオンボロ軽自動車の隣に乗せて走っていると、唐突に彼女が「わたしはついてる」と言った。左へ曲がって降りていく細い坂道へ入るためにハンドルを切ろうと思っていたときだ。

「何だこいつは」、「何を言っているんだ」と、あっけに取られた。こんなことを思っている人もいるんだ。苦労をしたことないんだろうか？自分は「ああどうして自分だけこんな辛い思いをしなきゃならないんだ」と思う方だった。実際、日本人のどれくらいの方が自分はついでと思っているのでしょうかね。

「就職活動もしなかったのに、今の高専の先生になれたのも、大学の先生が推薦してくれたからだし、わたし

ついでる。」

これから大きな借金をして、新規就農をしようとしている初めて会った男。そんな男と結婚しても自分は大丈夫なんだと、自分に言い聞かせていたのだろうか。彼女は私よりも早くさっさと結婚をする決断をしまい、九月に出会って翌年の三月には、トラクターに乗れるようにと大特の免許まで取って、嫁に来てくれた。こうして一緒に農業を始められることになった（結婚してないと農協がお金を貸してくれません）。妻にこの時の話を聞いても全く覚えてはいないそうだ。

掛かり付けの獣医の前野さんが松下幸之助さんの話しを教えてくれた。松下さんが会社を作ったころ、入社試験のときに必ず「あんたはん、ついてまっかあ」と質問をした。そして「ついてます」と答えた人は採用したのだという。「ついてない人を雇うと、ついてない会社になつてしまうし、ついていない人が集まっている会社はついでる」からだそうだ。

松下さんの本は何冊か読んだことがあった。びっくりドンキーの牧場で働いて、初めて人を使う立場になった時、どうしたらいいのか悩み、本屋でふと手にした松下

さんの本を買った。それまで、ビジネスや経営のジャンルの本など金儲けの本だと軽蔑して読んだこともなかった。本を読んで、経営とは人格なんだなと感銘を受けた。

結婚してから「ついでる」っていう言葉は感謝の言葉なんだ、と気が付いた。今あるのは、自分の力だけではなく、むしろ自分以外のもののおかげである。「ついでる」とは傲慢な心ではなく、謙虚な心なのだ。爆弾が降ってこなくて、お腹一杯にご飯を食べられる今の日本に生まれてきただけでついでますよね。これも前野さんに聞いたのだけど、人気タレントのさんまさんのお子さんの名前は「いまる」といって、「いまいるだけでまるもうけ」という意味だそうだ。余談になるけれど、大学時代から愛読してきた心理学者の河合隼雄先生が、日本には「おかげさま」と「もつたいない」という二つの神様がいると言っていた。

就農をしてから十二年経って、前野さんが斎藤一人（ひとり）さんの『変な人の書いた成功法則』という本を紹介してくれた。一人さんも商人で、累計納税額が日本一だそうです。それまで、哲学の本を読んでわけがわからない自分になるか、自己啓発の本を読んでどのように出来ない自分を情けなく思うかのどちらかだった。しかし、

就農をしたばかりでストレスの多かった私の心をこの本は軽くしてくれた。人生困ったことは起こらない、面白いことが起きたと思えばよい。人は幸せになるために生まれてきた。そのためには、顔につやを出す、光物を身につける、肯定的な言葉を使い否定的な言葉を使わない、の三つをすればいいと書いてあった。どんなことが起きてもついてると言えるように、高校野球をやっていた私であればバットの素振りのように、ついでるを繰り返して口癖にする。このようにして肯定の金太郎飴になると、時計のチクタクという音が、ついでる、ついでると聞こえてくるそうです。でも人生の中では、どうしてもついてると言えない事もありますよね。そういう時は、「わけがわからないほどついてる」と言えば良いそうです。

一人さんの言う幸せは、大金持ちになることではなくて、小さな足元の幸せに気づいて喜ぶことの出来る「小さな幸せ見つけの名人」になることです。面白いのは「ささやかでもいい、平凡な幸せが欲しい」ではなくて、「波乱万丈どんと来い」という気構えで生きていくという事です。何が起こったから幸せだとか不幸せだとかいうのではなくて、人生は心のあり方、心の持ち方が幸せかどうかですよ。一度幸せになったら二度と不幸

せになれない」のです。

お寺さんから頂いたマッチの箱には「静かなころ」と書いてありましたが、私の今年の目標は「気楽なころ」です。

沖縄の観光の話に戻りますが、水族館で人馬一体ではなく、人とイルカが一体となったイルカショーを見ていたら涙がぼろぼろこぼれてきてしまった。まさに「ナダソウソウ」でした。バックグラウンドにかかっていたラブソングがいけなかったのだろうか。

また他の場所、若い女の子達が沖縄民族の踊りを力の限りに踊っている姿を見ていたら、涙ぐんでしまった。また是非行ってみたいくなる沖縄でした。



植坂山を背景に吉川ファミリー（3年前なので、今は子供達も大きくなっています）